

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13453

研究課題名（和文）モンゴル語のアスペクト体系の生成と進化に関する研究

研究課題名（英文）Descriptive study on the generation and evolution of the grammatical aspect in Mongolian

研究代表者

松岡 雄太（Matsuoka, Yuta）

関西大学・外国語学部・准教授

研究者番号：40526688

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代モンゴル語において、アスペクト的意味を表わす補助動詞の意味・用法の記述とその体系化を自指したものである。その際、文法化の観点から、それぞれの補助動詞の使用制限に着目した。その結果、モンゴル語は「継続」、「開始」、「終了」といった各意味カテゴリにおいて、無標形と有標形が対立していること、有標形はいずれも一定程度、本動詞としての語彙的意味が使用制限という形で残っており、現在文法化しつつある途上にある可能性が高いことなどが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、第一に、日本語や英語のように研究がまだ進んでいない、モンゴル語文法の記述研究に貢献するものであるが、加えて、言語変化・言語接触の理論的な研究にも貢献する点で学術的意義がある。また、将来的にモンゴル語と他言語の詳細な対照研究などが進めば、外国語教育への応用という点において社会的意義も出てくるが、本研究はその足がかりの一つになりうる基礎研究と言える。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to describe the semantic and systematization of auxiliary verbs that represent aspectual meanings in modern Mongolian. When I analyse the degree of grammaticalization of each auxiliary verb, I focused on these usage restrictions in the discourse. As a result, I discuss the following three major findings. Firstly, in Mongolian, marked and unmarked forms conflict in each aspectual meaning such as “durative”, “beginning” and “end” of the action. Secondly, the lexical meaning of the main verb remains as a usage restriction in all the marked forms. Finally, these marked forms are currently grammaticalizing.

研究分野：言語学

キーワード：モンゴル語 アスペクト 補助動詞 文法化

1. 研究開始当初の背景

現代モンゴル語のアスペクト(日本語の「する」と「している」の違いに相当)を表わす手段の一つに補助動詞(「している」の「いる」に相当)がある。この点に関して、清格爾泰(1991)は、モンゴル語の補助動詞を、次の(a)~(c)の三つに分類していた。

- (a)アスペクト的な意味を表すもの: bayiqu<ある・いる>、saGuqu<座る・住む・暮らす>、ekileku<始める・始まる>、baraqu<つきる>、daGusqu<終わる>、yabuqu<行く>、ireku<来る>、ociqu<行く>、oroqu<入る>、orkiqu<置く>、qocorqu<遅れる>、Garqu<出る>、GarGaqu<出す>
- (b)ムード的な意味を表すもの: bolqu<なる>、cidaqu<できる>、ilaqu<勝つ>、deilku<勝つ・克服する>、yadaqu<苦しむ>、Garqu<出る>、medeku<知る>、olqu<得る>、Ujeku<見る>
- (c)その他: abqu<取る>、Ogku<あげる・くれる>

報告者は松岡(2008)において、モンゴル語に文法的なアスペクト範疇が存在すること、そして補助動詞 bayiqu がその中心的な役割を担っていることを明らかにした。bayiqu については、その後、Brosig(2014)、伶艷(2016)などによって、より精密な記述研究が行なわれてきた。一方で、bayiqu 以外の補助動詞についても、近年になって主に巴德瑪、斯欽格日樂の両氏によって、研究が進みつつある(巴德瑪 2012、斯欽格日樂 2010、2014、2015、2017a、2017b など)。だが、補助動詞の中にはまだこれまで全く記述研究が行われていないものもあり、研究が行われている場合であっても、従来の研究は、1)各補助動詞の意味・用法の記述、2)日本語など他言語との対照、に焦点を当てるに留まり、「体系的な」記述の段階に及んでいなかった。

2. 研究の目的

補助動詞は、本来本動詞だったものが文法化し、文法的機能を有するに至ったものである。例えば、上記の bayiqu は、もともと「ある・いる」の意味を表す本動詞だったものが、「継続」の意味を表わすアスペクト形式になったものである。これは、もともとモンゴル語は文法的な手段でアスペクトを表せなかったところへ新たにその範疇が生じたか、あるいはもともとあったアスペクト体系に新たに bayiqu が入り込んだ、といった可能性が考えられる。こうした文法範疇の生成・進化は現在も日々進行していると報告者は考え、モンゴル語の補助動詞には、文法化が進んでいるものから、やや進んでいる(あまり進んでいない)もの、ほとんど文法化せず語彙レベルに留まるものに至るまで、様々なレベルのものが混在していると仮定した。従来の研究は、このような文法化の程度を区別せず、一様に補助動詞として扱っていた。

こうした仮定に基づき、1に挙げた補助動詞のうち、(a)の動詞を対象に、その意味・用法の記述に加え、文法化の程度も記述することにより、現代語という共時態において、モンゴル語の各補助動詞はいかなるアスペクトの意味を表わすのか、その体系はどのようになっているのか明らかにすることを研究の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 文法化の程度を明らかにするにあたり、本研究では次のような方法を取った。工藤(1995)によれば、当該言語に何らかの文法範疇が存在するかを判断する基準は、以下の(a)~(e)の5項目を全て満たしているかどうかにある。

- (a) 義務性(使用の強制)
- (b) 包括性(あらゆる動詞、或いは述語形式をまきこんでいること)
- (c) 規則性(一様な形式的指標の存在)
- (d) 抽象性・一般性(語彙の意味からの解放)
- (e) パラディグマティックな対立性(相補的対立関係)

上の(a)~(e)を部分的に満たしているものが文法化の途上にあると考えた。中でも、本研究では(d)と(e)に着目した。(d)は、補助動詞の使用制限として本動詞の語彙の意味がどれほど残っているか、と捉えることができる。この点については、補助動詞の統語的特徴を詳細に記述することで明らかにできると考えた。統語的特徴とは、結合する動詞クラス、前接する副動詞形語尾(日本語の連用形に相当)の種類、共起するテンス・ヴォイス・ムード形式の種類、主語・目的語の制限、スクランプリングの可否、本動詞と補助動詞の間に挿入されうる要素、否定のスコープなどである。(e)については、当該形式の意味を記述するにあたり、その形式のみを対象とするのではなく、その形式と対立する形式を常に念頭に置き、その意味・用法の違いを記述することで明らかにできると考えた。

(2) 本研究では、モンゴル語の諸方言のうち、中国内蒙古自治区東部で話されているホルチン方言を主たる調査対象とし、それ以外の方言も適宜、調査対象とした。調査は、中国内蒙古自治区の現地に赴き、モンゴル語母語話者を言語コンサルタントとし、直接インタビューするという形をとった。言語コンサルタントは必要に応じて、年齢、性別、出身地が異なる複数名を対象とすることで、多角的に文文化の程度差を明らかにできるようにした。

(3) 調査票の作成、調査結果データの分析にあたり、同じ東アジアの膠着型言語である日本語、朝鮮語、満洲語との対照という視点も取り入れた。

4. 研究成果

(1) 第一に、本研究では補助動詞の再定義から行なった。従来の研究者は、補助動詞の定義を、文法的な意味を獲得しているかどうかという意味的な基準に依拠していたが、報告者はこうした意味に基づく定義に、補助動詞と複合動詞の違いが曖昧になるなどの問題点があることを指摘し、代案として、スクランプリング(語順入れ替え)可否、「bol」と「basa」(それぞれ日本語の「は」と「も」に相当)の挿入可否、受身文・使役文にする際、ヴォイス接辞がつくのが前項動詞(V1)か後項動詞(V2=補助動詞)か、といった統語的基準に基づく定義を提案した。報告者の定義に基づく、補助動詞と複合動詞の違いも判断することが可能となる。(詳細は5に示す「雑誌論文4」と「学会発表7」)

	本動詞	複合動詞	補助動詞
スクランプリング		x	x
bol/basa 挿入	(x)	x	
ヴォイス接辞		V2	V1

(2) 第二に、動作の開始局面に言及する「ekilekU」<始める・始まる>に対し、動作の終了局面に言及する「daGusqu」<終わる>、「daGusqaqu」<終える>、「baraqu」<つきる>、「barGaqu」<つくす>の詳細な意味・用法を記述した。動作の終了局面に言及する形式には方言差があり、「daGusqu」と「daGusqaqu」はモンゴル国のハルハ方言及びハルハ方言に隣接するいくつかの方言で、「baraqu」と「barGaqu」はホルチン方言をはじめ、中国内蒙古自治区の主たる方言で使われることが分かった。両者の間に意味的な違いはないと考えられる。

また、自動詞の「baraqu」(daGusqu)に対し、他動詞の「barGaqu」(daGusqaqu)は、動作が終了限界に達成したことのみならず、終了限界に至るまでの過程にも何らかの含意を含んだ有標表現であることが分かった。この含意性は本動詞のbarGaquが他動詞であり、主語に意志性があることから来たものと考えられる。(詳細は5に示す「雑誌論文3」と「学会発表6」)

(3) 第三に、動作の終了局面に言及する「Garqu」<出す>と「GarGaqu」<出る>の詳細な意味・用法を記述した。「baraqu」が動作の単なる終了を表わす無標形であるのに対し、「Garqu」、「GarGaqu」は動作終了に対するモダリティが働いており、「何らかの結果(成果)的なもの」を「出す」状況でしか用いられない有標形であることが分かった。そのため、「Garqu」、「GarGaqu」が使える状況は、無標形「baraqu」に比べかなり限定的であり、有標形「GarGaqu」にはさらに自動詞との共起制限、再帰的な状況で使えないという制限があることも確認された。「GarGaqu」が表わす「結果(成果)的なもの」は客体に変化が及ぶ場合にのみ言え、こうした使用制限は本動詞としての語彙の意味が残っていることによるものと考えられる。「baraqu」が動作の終了限界に言及する無標形であるのに対し、「Garqu」、「GarGaqu」が特殊な意味を付加した有標形だと考える根拠は、否定形にしたときの非対称性にも見いだせる。(詳細は5に示す「学会発表1・4」)

(4) 第四に、上と同様、この他にも「saGuqu」<座る・住む・暮らす>、「oroqu」<入る>、「ociqu」<行く>は、それぞれ「bayiqu」、「ekilekU」、「yabuqu」に対応する有標形である可能性がある。最後に、残る「orkiqu」<置く>、「qocorqu」<遅れる>の二つは、共起する動詞に強い制限があり、使用できる状況が極めて限られているため、複合動詞に限りなく近い、文文化がほとんど進んでいない段階にあると考えられる。(詳細は5に示す「学会発表3」)

(5) モンゴル語においてアスペクトの意味を表わす補助動詞の体系は、文文化の程度(語彙の意味の残存)に着目することで、以下のように描くことができた。

【継続】

無標形	bayiqu
有標形	saGuqu

【開始・終了】

	開始	終了		
無標形	ekilekU	baraqu(daGusqu)		
有標形	oroqu	barGaqu(daGusqaqu)	Garqu	GarGaqu

【方向】

無標形	yabuqu	irekU
有標形	ociqu	

また、本研究を進めていく過程で、意味的に無標な形は有標形に比べ文法化が進んでおり、無標形を後追いするように有標形が対立項として文法化する可能性があるという新たな仮説を立てることもできた。今後は、モンゴル語の補助動詞のうち、モダリティを表わすものの研究、モンゴル語以外の他言語（特にモンゴル語と同じ類型に属するアルタイ型言語）との対照研究を進めることで、この仮説を検証していく必要があるだろう。

(6) 最後に、他言語との対照研究という点において、今回、モンゴル語と典型的に同じアルタイ型言語に属し、地域的にモンゴル語と隣接する朝鮮語と満洲語の研究も補完的ながら行なうことができた。朝鮮語に関しては、従来の研究において補助動詞と認められていなかった「danida」<通う>を本研究と同じ視点から検討しなおしたとき、本動詞の語彙の意味が使用制限として残る、文法化の途上にある補助動詞の一つに含まれる可能性が高いことを明らかにした（詳細は以下に示す「雑誌論文1」）。満洲語に関しては、これまで文献資料の存在は知られていたが、ほとんど研究されていなかった『翻訳満語纂編』、『翻訳清文鑑』の調査研究を進めることができた（詳細は5に示す「雑誌論文2・5」、『学会発表2・5』）。

<引用文献>

- 清格爾泰(1991)『蒙古語語法』、内蒙古人民出版社
- 松岡雄太(2008)「モンゴル語のアスペクトに関する研究 満洲語・朝鮮語との対照研究」
、博士論文（九州大学）
- Brosig, Benjamin(2014) *Aspect, evidentiality and tense in Mongolian*, Stockholm University.
- 伶艷(2016)「モンゴル語の存在動詞に関する形態・統語論的研究 日本語との対照」
博士論文（岡山大学）
- 巴德瑪(2012)「日本語とモンゴル語における補助動詞の対照研究」
、博士論文（神戸大学）
- 斯欽格日樂(2010)「モンゴル語の補助動詞《abu-》の意味について」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』4: 389-400.
- (2014)「モンゴル語の補助動詞《oru-》の機能について」『思言:東京外国語大学記述言語学論集』10: 117-129.
- (2015)「モンゴル語の補助動詞《yar-》の機能について」『日本モンゴル学会紀要』45: 9-23.
- (2017a)「モンゴル語の補助動詞《yabu-》の機能について 内モンゴルにおけるモンゴル語中部方言を中心に」『言語・地域文化研究』23: 19-32.
- (2017b)「モンゴル語の補助動詞og-の機能について 内モンゴルにおけるモンゴル語「中部方言」を中心に」『日本モンゴル学会紀要』47: 47-61.
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト 現代日本語の時間の表現』
、ひつじ書房

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 松岡雄太	4. 巻 21
2. 論文標題 現代朝鮮語における「danida」の補助動詞の用法について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 外国語学部紀要	6. 最初と最後の頁 37-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松岡雄太	4. 巻 20
2. 論文標題 『翻訳満語纂編』の満洲語語訳に対する日本語訳の原則	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Diversity and Dynamics of Eurasian Languages(Contributions to the Studies of Eurasian Languages)	6. 最初と最後の頁 321-344
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松岡雄太・巴徳瑪	4. 巻 22
2. 論文標題 動作の開始・終了限界に言及するモンゴル語の補助動詞に関する覚書 「ekile-」・「daGus(qa)-」 「bar(Ga)-」を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 長崎外大論叢	6. 最初と最後の頁 189-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Badema・Yuta Matsuoka	4. 巻 46
2. 論文標題 Odu Uye yin MongGul Kelen u Tusalaqu Uile Uge yin SodulaGan u Bayidal jici Orusiju BayiGa AsaGudal un Tuqai	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 内蒙古師範大学学报哲学社会科学蒙文版	6. 最初と最後の頁 59-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 松岡雄太	4. 巻 21
2. 論文標題 『翻訳満語纂編』の語釈における日本語の誤訳について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 長崎外大論叢	6. 最初と最後の頁 61-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件(うち招待講演 0件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 巴徳瑪・松岡雄太
2. 発表標題 ホルチン方言の補助動詞「Gar(Ga)-」の意味と使用制限について
3. 学会等名 日本モンゴル学会2019年度秋季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松岡雄太
2. 発表標題 日本の清文鑑類満洲語辞典の受容と様相(朝鮮語による発表)
3. 学会等名 第9次高麗大学校民族文化研究院満洲学センター国際学術会議(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松岡雄太
2. 発表標題 モンゴル語の補助動詞と文法化 アスペクト的意味を表すものを中心として
3. 学会等名 「モンゴル諸語の言語変容 外的要因と内的要因」共同利用・共同研究課題研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松岡雄太
2. 発表標題 モンゴル語における“GarGa-”の文法化 複合動詞か補助動詞か？
3. 学会等名 2018年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松岡雄太
2. 発表標題 駒澤大学濯足文庫本『翻訳清文鑑』と『翻訳満語纂編』について
3. 学会等名 満族史研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松岡雄太
2. 発表標題 モンゴル語における動作の開始と終了を表す補助動詞に関する予備的考察
3. 学会等名 2017年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松岡雄太・巴德瑪
2. 発表標題 現代モンゴル語のアスペクト的意味を表す補助動詞について
3. 学会等名 大数据与語言学研究論壇（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	巴徳瑪 (Badema)		